

## 「大学生への授業」

2018年7月、初めて大学からブレインジム体験会の依頼をいただきました。小学校勤務の時代にご一緒だった、元養護教諭の先生からのお話でした。現在は大学の准教授として勤務されています。学生さんは、将来養護教諭を希望しているので、養護教諭教員養成課程へ入学したということでした。階段状のひろい講義室で、准教授の先生方も含めて、10名弱の方々へお伝えするという体験会でした。今回も私にとって、新たな試みとなりました。

私も教育現場での経験が長いので、養護教諭の先生が学校にとって一つの要であり、児童や生徒にとって、いかに大きな存在であるかということを熟知しています。そして、現職の時には校務での役割が、何故か、保健部へ所属することが多かったので、養護教諭の先生とは密に

お話をさせていただいたものでした。ですから、最初に養護教諭が学校の中でいかに大事な要であるかということから、授業を始めました。そして、そのためには自分の力を十二分に発揮できるよう、ブレインジムを一つの道具として使って欲しいことを語りました。今回も、依頼をいただいた准教授の先生以外は、どなたもブレインジムを知りませんでした。そして、前置きが長くなつたので、その後はペースの説明と動きが同時進行で話を進めていくことになりました。学生さんは、メモしながら熱心に耳を傾けていました。その時の真摯なまなざしが想い起こされます。

その後、後半には各自が目標設定をしてのバランス調整へと進んでいきました。私がデモンストレーションの学生さんのバランス調整をしながら、他の方々も

堀 弘子（神奈川県）

一緒に、バランス調整をしていく形をとりました。ですからアクティビティは、各々が希望した動きを全員で体験することになりました。

養護教諭を志している学生さんは、皆、真剣な姿勢で取り組んでいました。これから学校現場が、子ども達の成長を支え、未来への意欲を育むオアシスであってほしいという願いを胸に、終了と致しました。

その後、この授業を受講しての感想や心身の変化等のアンケートを書いていただきました。授業の始まりには、半信半疑の面持ちで、硬い表情をされていた学生たちでしたが、授業終了後には、リラックスされた様子で、アンケート用紙への記入にペンを進めていました。



## 2018ブレインジムディ ポスター発表から

### 「ブレインジムディに参加して」

「私はブレインジムを自分と家族のためにこう使っています。」この夏のポスター発表のテーマを知った時(これなら今の私にもできる!)と嬉しくなりました。ここ数年インストラクターとして、講座やセッションをする時間をなかなか持てず残念に思っていました。「BG浦島太郎さん」と自覚し、せめて今の教育キネシオロジーの現場を知りたくて、昨年からブレインジムディにだけは参加していました。(周りの方はどうな風にブレインジムと関わっているのだろう?)昨年はそんな気持ちで参加しました。今年は(自分にとっては当たり前のことが、もしかしたらどなたのお役に立てるかもしれない。)そんなワクワクとした気持ちで参加させていただきました。

ポスターは朝から晩までの自分の行動パターンを5つの項目

に分け、目標設定とエクササイズを取り入れたシンプルなものになりました。緊張していたのですが、たくさんの方々に温かく声をかけていただき、嬉しい気持ちが溢れました。きっかけをくれた同期インストラクターの友人や、今まで親切に対応してくださった協会の皆様に心より感謝しております。

遠藤 由美子さん（東京都）

できるよう、BGや自分の経験を通して幼稚園の若い先生方の保育の提案をしています。

#### Q) 将来の展望は？

乳幼児期の身体づくりの重要性を現場の先生方にお伝えしていきたいと思っています。子どもたちが毎日生活する場で、先生方が正しい知識のもと、本当に子どもの育ちに寄り添った関わりが提供できれば、乳幼児期から自分の身体を大事に扱っていく知恵をつけることができます。ただ、現場の先生方は毎日忙しく、保育の他、打ち合わせに保護者対応、行事準備に追われています。目の前の仕事に手一杯で、「本当に大事なこと」にフォーカスした保育をする余裕が無い場合がほとんどです。先は長そうです。でも、少しずつでも良いからこのような事を伝え続ける。その気持ちは今後も変わらないと思います。

#### Q) ブレインジムへの思いについてひとこと。

こんな風に学び始めましたが、まさかBGインストラクターとして活動するとはゆめにも思いませんでした。自信もありませんでした。でも、それを可能にしたのは、やはりBGと、私の中にある保育への思いがつながっているからだと思います。私をより良く変える事が出来たBGは本当にすごい。これからも自分自身がBGに助けてもらいつながら、地道に活動していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



### 動くことが学習の入り口を開てくれる

#### 「数と動き」

私は算数に苦労している小学生を支援するスペシャリストとして、クラス授業をしたり、小人数のグループや1対1での個別指導をしています。グループや個別指導をしているときに、子ども達が算数に対して成功体験を持つためには何が良いのか?を私自身が経験することができます。

私が気づいた主要な問題は、算数に苦労している子どもの大多数は右脳優位か左脳が弱いということでした。これらのケースでは、彼らの右脳半球に届く方法で算数が提示される必要があります。そうすると、左脳を強化する機会を持つことになります。右脳優位の子ども達には、算数の問題を実質的にしたり描いたりすることが有益です。数に何が起きているのかを見て知ることができるからです。

例えば、 $2+3$ の計算式では、2つの棒と3つの棒を持ってから全てを数える、または2個を描いてから3個を描き、全てを丸で囲んで一緒になっているということを示します。

右脳優位、または左脳へのアクセスが限られている子ども達を観察していると、かけ算九九を5回覚えたとしても、答えを



リサ・アン・デ・ガルシア（アメリカ）

尋ねられたときに、数を思い出すのに苦労していることに気づきました。長期記憶にならないのです。

しかし、彼らは関係性を見て問題を解くことが上手です。(右脳体験があれば、ですが)例えば、 $2 \times 4 = 8$ の計算式を $2 \times 4 = 8$ と $4 \times 2 = 8$ に分けたり、 $1 \times 2 = 2$ を倍にして答えを導き出したりします。

左脳が弱い子ども達は、計算障害(dyscalculia)といわれるような困難さを体験します。計算障害では、計算が全くできません。数の順を理解したり、逆に数を数えること、単純な計算式の答えを覚え、それを思い出すということが難しいのです。こういった子ども達を教えるのは難しいことなので、脳染を活発にし、両脳半球にアクセスする方法を探すことが重要です。算数は、数を思い起すこととパターンを認識すること(左脳)、問題と答えを理解する能力(右脳)の両方が求められるからです。

